

保育士養成課程における施設実習に関する課題

— アンケート調査からの一考察 —

The Task about Institutional Practice in Nursery School Staff Training Course — A Study from Results of a Questionnaire Survey —

(2009年3月31日受理)

小倉 毅 土谷由美子
Takeshi Ogura Yumiko Tsuchiya

Key words : 保育実習, 学生意識, 比較

抄 録

保育士養成課程である本学において保育士資格取得は必修である。本学のカリキュラム上、初めての実習が施設実習である。施設実習に臨む学生が、福祉施設の内容・機能を現場で体験し、大学で習得した知識・技能を用い実践する応用力を養うことができたか明らかにしようとアンケート調査を行った2年分である。その結果、社会福祉施設と施設で働く保育士の役割を十分理解できたことは、目標とする施設への理解は達成されていた。教育的課題については、課題・目標はボランティア体験を通じて、生活する児童の特徴、支援方法等を学習させないといけない。実習日誌については、日頃の記述訓練により、目標に沿った内容が見いだせるようにしなくてはならない。カリキュラムについては、施設実習までに受講しておきたい科目に検討を行わなくてはならないことがわかった。

I. はじめに

近年、社会経済的な変化や人口構造の変化によって、家庭の就業構造や家族構造¹などが大きく変わり、児童の生活形態も多様となっている。また、児童虐待の増加や発達障がい児の対応などが社会的問題となるなかで、より保育士の役割が増大している。

保育士の業務を概観すると、児童福祉法総則において、児童福祉の理念、児童の育成の責任、原理の尊重が明示されている。また、児童福祉施設²を利用する児童（満18歳に満たない者、身体に障がいのある児童又は知的障がいのある児童）に対して、保育士は「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行う者」（児童福祉法第18条4）としている。つまり、保育士は児童福祉の基本的理念を理解したうえで、児童や保護者が心身ともに健やかに育成する責任を負った専門職であると

いえる。

保育士養成校における保育士養成課程では、保育士の資質を培うために、保育士資格を希望する者は「指定保育士養成施設の指定及び運営基準」にある「保育実習は、習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力を養うため、児童に対する理解を通じて理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」²として以下の施設実習目標を掲げている。

1. 児童福祉施設の内容、機能等を実践現場での体験を通して理解させる。
2. 既習の教科全体の知識・技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力を養う。
3. 保育士としての職業倫理と子どもの最善の利益の具体化について学ばせる。

本学における保育実習 I についても、運営基準を参考に①学内における実習に関する「事前および事後指導」（施設実習研究及び保育所実習研究の各1単位）②施設

実習^{注2}10日間（2単位）、③保育所実習10日間（2単位）、④保育所実習Ⅱ（保育所10日間で2単位）もしくは保育所実習Ⅲ（施設10日間で2単位）の選択必須があり、どちらかを履修する必要がある。

次に施設実習の履修については、岡山県保育士養成協議会において、施設実習のあり方について具体的な実施基準を設けている。それによると、施設実習は参加実習と位置づけられており、子どもへの理解を深めるとともに、居住児童福祉施設等の機能とそこでの保育士の職務について学ぶことが目標としてあげられている。³

（具体的な目標：実習の手引き抜粋）

1) 利用児（者）の理解

- ① 利用児（者）との生活を通して理解する
- ② 利用児（者）のとらえ方を深める。

2) 養護活動と養護技術への理解

- ① 各施設の目標に沿った養護活動の実際を理解する
- ② 技術を学ぶ

3) 施設への理解

- ① 施設の役割と機能についての理解
- ② 体験的理解と福祉観の変革・再構築

本学の実習時期は、1. 施設実習を1年次の後期定期試験終了後の2月中旬、2. 保育所実習Ⅱは6月上旬、3. 保育所実習Ⅱ及び施設実習Ⅲは保育所実習に続けて設定している。したがって、保育実習Ⅰにおける施設実習は保育士資格を取得するための実習として初めて出る実習であること、さらに10日間の宿泊実習であることから実習中の緊張に加え、自宅に帰れないといったストレスを抱えながらの実習となる。

しかしながら、本学保育学科に入学してきた学生の殆どが保育士の職域を保育所というイメージで捉え、児童福祉施設も対象であることを十分に理解しているとはいえない。また、保育士養成校における保育士養成課程は、主として乳幼児を対象とした保育所に関する内容を多く扱っていることや、施設実習の実習先が居住型の児童福祉施設に加え、知的障がい者更生施設・知的障がい者授産施設で実習（以下 社会福祉施設とする）を行うために、保育士としての対象の範囲や支援内容などが理解できないのが現状である。

そこで本研究では、施設実習に臨む学生が、本来の目

的である児童福祉施設の内容、機能を実践現場での体験を通じて理解し、既習の教科全体の知識・技能を用いて、総合的に実践する応用力を養うことができたかを明らかにしていく。

Ⅱ. 調査方法

- 1) 調査対象者は中国短期大学保育学科の2007年度生114名、2008年度生97名の「施設実習」履修者211名に対してアンケート調査を行った。
- 2) 各設問項目に自由記述欄を設け、具体的な内容を記述してもらった。実習先への配慮として、ここでは施設種別を明確にしない。
- 3) 調査時期2008年3月、2009年3月施設実習終了後にアンケート調査を行った。

Ⅲ. 結果と考察

1) 実習先及び社会福祉施設のイメージについて

① 実習先について

施設実習先は表1の通り、知的障がい者更生施設が46.0%と最も多く、次いで児童養護施設19%である。知的障がい者更生施設と知的障がい者授産施設を合わせると56%となり、ほとんどの学生が児童福祉施設ではなく知的障害者福祉法の定める成人施設で実習していることが理解できる。

また、知的障がい児施設や重症心身障がい児施設で生活している利用者の高齢化が進んでいることから、障が

表 1

	度 数	パーセント
乳児院	8	3.8
児童養護施設	40	19.0
児童自立支援施設	6	2.8
情緒障がい児短期治療施設	3	1.4
知的障がい児施設	17	8.1
肢体不自由児施設	4	1.9
重症心身障がい児施設	15	7.1
知的障がい者更生施設	97	46.0
知的障がい者授産施設	21	10.0
合 計	211	100.0

い児系の施設で実習する学生は、18歳以上の利用者との
かかわりとなっている。

② 実習前と実習後の社会福祉施設に対するイメージ

本学では、保育実習Ⅰを履修した場合、社会福祉施設の現状を理解するために3日以上ボランティアを義務づけている。そこで、施設実習前と終了後では、どのようにイメージ（印象）が変化したのかを質問した。

実習前の社会福祉施設に対するイメージは表2-1の通りである。最も多かったのは「悪いイメージ」の41.2%で、「イメージ通り」と「非常に悪いイメージ」を加えると42.1%の学生が、社会福祉施設に対して隔離や暗い、集団生活で自由がないといった何らかの固定概念をもっていたと考えられる。

また、「良いイメージ」25.1%と「非常に良いイメージ」を含めると29.8%が社会福祉施設の生活環境に対して好感的なイメージを抱いていたことがわかる。

これらの結果は、3日間という短い時間から得た経験の情報をもとに判断していると考ええる。

次に実習後のイメージでは表2-2の通り「非常に良いイメージ」と「良いイメージ」を含めると88.6%となる。これらは、表3-1・2・3の施設利用者の生活状況の通り、利用者の生活状況や環境、職員との関係をボランティアで経験し得た情報と照らし合わせながら、一つひとつの生活習慣や環境、子ども同士のかかわり、職員との関係や支援方法などを肯定的に捉えていったことが理解できる。

表2-1

	実 習 前	
	度 数	パーセント
非常に良いイメージ	95	45.0
良いイメージ	92	43.6
イメージ通り	18	8.5
悪いイメージ	5	2.4
非常に悪いイメージ	1	0.5
合 計	211	100.0

表2-2

	実 習 後	
	度 数	パーセント
非常に良いイメージ	95	45.0
良いイメージ	92	43.6
イメージ通り	18	8.5
悪いイメージ	5	2.4
非常に悪いイメージ	1	0.5
合 計	211	100.0

【表2-1・2に関する自由記述：比較できるように実習前と実習後は同一の学生の記述を記載】

*実習前のイメージ（表2-1）

学生A：コミュニケーションがとれるか不安。寝たきりで介護を受ける方ばかりなのかと思った。

学生B：非行少年に対する恐れがあった。

学生C：日常的な生活を集団で行っている場。

学生D：あまり活気づいていなくて、暗いイメージ。

学生E：虐待を受けている子や様々な家庭環境だと思うので接し方が難しいと思った。

学生F：周りから隔離されていて暗いイメージだった。

*実習後のイメージ（表2-2）

学生A：職員の方は、利用者の細かい行動、表情、目線などをしっかり見ていて、それに応じた援助をしていた。利用者の方は優しく、障がいをもっていないでも変わらないのだと思った。

学生B：実習前と真逆だった。

学生C：異年齢の子どもたちと関わりがあり、先生たちと良い関係を築いている大家族のような感じ。

学生D：職員の方も温かくて良い雰囲気だった。利用者の方も元気で気さくな方ばかりで楽しかった。

学生E：利用児は、明るくてよく話しかけてくれた。

学生F：地域との交流も沢山あり、明るかった。

表 3-1

施設利用者の生活状況について		
	① いきいきと生活していた	
	度 数	パーセント
非常にあてはまる	92	43.6
かなりあてはまる	73	34.6
だいたいあてはまる	42	19.9
あまりあてはまらない	4	1.9
全くあてはまらない	0	0.0
合 計	211	100.0

表 3-2

施設利用者の生活状況について		
	② アットホームな環境	
	度 数	パーセント
非常にあてはまる	85	40.3
かなりあてはまる	63	29.9
だいたいあてはまる	57	27.0
あまりあてはまらない	6	2.8
全くあてはまらない	0	0.0
合 計	211	100.0

表 3-3

施設利用者の生活状況について		
	③ 職員との関係は良好	
	度 数	パーセント
非常にあてはまる	92	43.6
かなりあてはまる	79	37.4
だいたいあてはまる	36	17.1
あまりあてはまらない	4	1.9
全くあてはまらない	0	0.0
合 計	211	100.0

【表 3-1・2・3に関する自由記述】

学生A

3-1 障がいなんて忘れてしまうほど、元気いっぱい
で積極的に話しかけてくれた。

3-2 子どもたち同士で兄弟のような関係にあり、職
員が親の代わりになっていた。

3-3 いつも笑顔で会話しており、全員とコミュニ

ケーションをとっていた。

学生B

3-1 利用者さん同士が協力し合って生活していた。

3-2 職員の方と利用者さんは、とても仲がよさそうだった。

3-3 毎日、ほぼ全員の利用者さんに話しかけていた。

学生C

3-1 同じ寮の利用児と一緒によく話し、遊んでおり、
笑顔が多く見られた。

3-2 寮母さんたちが、児童に対して生活をしっかり
教えており、大家族のようだった。

3-3 利用児は職員に様々な話しをし、親のように慕
う場面が見られた。

2) 実習中に関する質問

① 実習に課題や目標をもって実習に臨めたか

10日間の施設実習に課題をもって臨めたかについては表4の通りである。「だいたいあてはまる」が54.5%で最も多く、「かなりあてはまる」・「非常にあてはまる」を含めると95.7%が何らかの課題や目標をもって実習に臨んだことが伺える。しかし、この結果を鵜呑みにすることはできない。なぜなら、自由記述欄には殆どの学生が無記述であることや、記述内容に「虐待を受けた子の対応を調べたが、それ以外はしていない」、「発達障がいについて調べる」、「肢体不自由児について調べる」、「調べていたが、文面だけでは理解しきれていないことを痛感した」、「発達障がいなどを調べておけばよかった」など、実習後に事前勉強が足りなかったなどと記述している学生が多くいたからである。

このことは、施設実習の目標である「利用児(者)の理解」や「養護活動と養護支援への理解」・「施設への理解」を講義や事前オリエンテーションのなかで十分理解できなかった結果、実習のなかで利用(児)者や職員とのかかわりのなかで目標設定していたと考えられる。

表 4

課題や目標をもって実習に望めたか		
	度 数	パーセント
非常にあてはまる	27	12.8
かなりあてはまる	60	28.4
だいたいあてはまる	115	54.5
あまりあてはまらない	8	3.8
全くあてはまらない	1	5.0
合 計	211	100.0

【表4に関する自由記述】

- 学生A：実習にテーマをもって取り組むことができた。
- 学生B：声かけについて、介助方法、利用児の特徴について。
- 学生C：利用者・職員の方と関わる事で、自分でできていないことがわかり、次の目標がたくさん出てきた。
- 学生D：実習が始まって、最初の方は目標をあまり考えないでしてしまった。
- 学生E：一人ひとりの利用者の特徴を把握し、その人にあつた対応をする。
- 学生F：大まかな課題を立て、実習をしていくなかで決まっていっていった。

② 実習中に個別指導・助言があつたかどうか及び担当職員との関係について

実習中に個別指導・助言があつたかについては表5-1・2の通りである。「あまりあてはまらない」8.5%、「全くあてはまらない」0.5%を除くと、殆どの学生が実習担当指導者をはじめとする職員から、利用児（者）の性格や特徴・支援方法に至るまで、きめ細やかな個別指導・助言があつたと考えられる。このことは「利用者と積極的に関わることができたか」の回答をみても推測できる結果である。

表5-1

	① 実習中に個別指導・助言があつた	
	度 数	パーセント
非常にあてはまる	71	33.6
かなりあてはまる	64	30.3
だいたいあてはまる	57	27.0
あまりあてはまらない	18	8.5
全くあてはまらない	1	0.5
合 計	211	100.0

表5-2

	② 利用者と積極的に関わることができた	
	度 数	パーセント
非常にあてはまる	83	39.3
かなりあてはまる	102	48.3
だいたいあてはまる	25	11.8
あまりあてはまらない	1	0.5
全くあてはまらない	0	0.0
合 計	211	100.0

【表5-1・2に関する自由記述】

- 学生A
- 5-1 日誌に対してや、質問したこと、行動などをみて、色々な助言をいただいた。
- 5-2 一度距離を置いてしまったが、助言を受けて積極的にかかわれた。
- 学生B
- 5-1 毎日、実習が終わる度に助言や話しをして下さった。
- 5-2 かかわれた子とかかわれなかった子の差が激しい。
- 学生C
- 5-1 とても丁寧に、わざわざ私を呼んで時間をとってくださいました。
- 5-2 何も喋れない方には、座って手を繋いだりして積極的に声をかけたりした。
- 学生D
- 5-1 個別指導で、どのように対応すれば良いかなどを教えてもらった。
- 5-2 2,3日は、暴言・暴力に耐えることができず、

自分から積極的に関わることができなかった。

③ 担当指導者からの指導内容（複数回答）

実習中に担当指導者からの指導内容は表6の通りである。「利用者とのかかわり」32.7%、「利用児（者）の実態」27.4%である。利用児（者）との具体的な関わりを示すと下記の内容があげられる。

- * 食事・排せつ・入浴介助といった養護支援方法。
- * 発達障がいのかたわりに対する対応や肢体不自由児に対する個別ケア方法。
- * 利用者の生活背景や暴力的な児童の対応方法などについて。
- * 施設理念や集団生活における活動内容など。
- * 子どもの叱り方、発達障がいについて。
- * 実習中の実習生の気持について、より良い方向へのアドバイス。
- * その場、その時の言葉がけ。（コミュニケーション）
- * 家庭支援専門員。

このように、担当指導者などの的確な指導及び配慮によって、学生はより良い環境のなかで実習できていると考えられる。しかし、身体介護を行う実習先からは、実習前のある程度の養護技術（介護技術）を学んできて欲しいといった要望があることも事実である。

表 6

担当指導者からの指導内容		
	度 数	パーセント
利用児(者)へのかかわり方	193	32.7
利用児(者)の実態	162	27.4
実習に対する基本的態度	63	10.7
日誌の書き方	71	12.0
施設の現状と課題	102	17.3
合 計	591	100.0

④ 実習日誌について

実習日誌については、実習施設から「基本的な文章の記入方法」を学び、「誤字脱字」のないよう指導してほしいなどの指摘をうけている。本学では、施設実習研究において「実習日誌や記録の意義や使い方、及びその配慮点」の講義と「日誌と事前訪問、報告書について」の直接指導において、基本的な日誌の書き方や提出につい

て指導し実習に送りだしている。ここでは、「担当指導者からの指導内容にある日誌の書き方」（表6）、次の項目である「実習中困ったこと」（表8）も含めて述べる。実習日誌の内容・書き方を指導してもらえたかについては表7-1の通りである。「非常にあてはまる」14.2%、「かなりあてはまる」22.3%、「だいたいあてはまる」33.2%であった。また、日誌などを迅速かつ適切に処理できたについては表7-2の通りである。「非常にあてはまる」10.9%、「かなりあてはまる」20.9%、「だいたいあてはまる」48.8%であった。次に「実習に困ったこと、大変だったこと」（複数回答）についての質問でも、18.3%の学生が「実習日誌について」困ったと回答している下記のようなコメントをしている。

- * 書く内容が似たようなものになってしまう。
- * 文章を上手く表現できない。
- * どんな内容を書けばいいか1日の振り返りが大変。
- * 支援の必要もなく、トラブルもなかったので書くのにこまった。
- * メモをとれなかったので、1日の流れを思い出すのに時間がかかった。
- * 職員の指導を受けた書き方が難しく困った。
- * 日々いろんなトラブルがあり、どこまで書いていいかわからなかった。
- * 1日2時間以上かかった。

このように、担当指導者から何らかの指導を受けながら日誌を書いていることがわかる。実習前から明確な課題をもっていた学生は日誌に関して悩むことはない。しかしながら、実習目標を明確にしている学生は、実習の振り返りに時間がかかるため、担当指導者から指導された具体的内容までたどり着けていないと考える。

表 7-1

	① 実習日誌の内容・書き方を指導してもらえた	
	度 数	パーセント
非常にあてはまる	30	14.2
かなりあてはまる	47	22.3
だいたいあてはまる	70	33.2
あまりあてはまらない	56	26.5
全くあてはまらない	8	3.8
合 計	211	100.0

表 7-2

	② 日誌など迅速かつ適切に処理できた	
	度数	パーセント
非常にあてはまる	23	10.9
かなりあてはまる	44	20.9
だいたいあてはまる	103	48.8
あまりあてはまらない	39	18.5
全くあてはまらない	2	0.9
合計	211	100.0

【表 7-1・2に関する自由記述】

学生A

- 7-1 見本を見せていただいたり、直していただいた。
7-2 メモするなどして、迅速かつ的確にできるようにつとめた。

学生B

- 7-1 丁寧に説明していただけた。
7-2 気になったことはメモしていたので、日誌などは割とスムーズに毎日できていたと思う。

学生C

- 7-1 課題をもっと具体的にしたら良いなど、その日のうちにアドバイスをいただいた。
7-2 日誌を書く時、1日たくさんの方があって何を書こうか迷って時間がかかった。

⑤ 実習中に困ったこと（複数回答）

実習中に困ったことについては表8の通りである。「利用児（者）との関係」が最も多く27.3%である。また、「実習中の自己管理」や「実習生同士の関係」を除くと、どの項目も横這いである。

職員との関係については、学生の受け止め方によって違って来るが、積極的に職員とも関わりたいという気持はあるものの、忙しい職員の姿をみていると、何時どのような場面で質問していいかわからない。また、自分自身に対する評価も気になるため「嫌われたくない」という気持が相俟って職員に対しても緊張する、また冷たく感じたと考える。

利用児（者）との関係・どこまで関わるべきかについては、自閉症や発語のない障がい児、意思疎通のとれない方のコミュニケーションの方法、利用者への養護支援

への範囲、利用者同士の喧嘩やトラブル時の介入方法、試し行動などの対応が分からず戸惑っていたことが理解できる。

利用者への支援方法については、食事や排せつ、入浴、移動介助といった日常生活に関する技術と支援範囲が分からなかったと考えられる。

自己の生活管理・実習生同士については自らの生活と違った環境で、他の学生とともに過ごさなければならぬ集団生活によるストレスが最も大きな原因であると考えられる。

表 8

実習中に困ったこと。大変だったことについて		
	度数	パーセント
施設職員との関係	74	12.5
利用児（者）との関係	161	27.3
実習生ができる範囲	107	18.1
利用児（者）への支援技術	81	13.7
実習中の自己管理	37	6.3
実習生同士の関係	22	3.7
日誌	108	18.3
合計	590	100.0

【表8の項目に関する自由記述】

*職員との関係について

学生A：冷たい職員がいてかかわるのが怖かった。

学生B：素っ気ない態度の職員に分からないことを聞いても冷たかった。

学生C：利用者と一緒にだったり、忙しそうで疑問に思うことを聞けなかった。

学生D：職員の前で緊張して利用者に関われなかった。

学生E：職員によって言うことが違っていること。

*「利用児（者）との関係」・「どこまで関わるべきか」

学生A：コミュニケーションが取れる方と取れない方。
(自閉症・障がいの違い・意思疎通がとれない・小学生高学年以上など)

学生B：利用児の試し行動への関わり。

学生C：利用者同士の喧嘩や言い合いの対応。

学生D：自傷行為をしたときの対応。

学生E：子どもと親の関係で情緒不安定になっているとき何処まで聞いていいのか。

* (利用者への支援技術)

学生A：歯磨き支援で、口腔内の奥まで上手く磨けなかった。

学生B：食事、排泄介助。

学生C：利用者の楽な姿勢。

学生D：足の不自由な方の移動の仕方。

* 自己の生活管理・実習生同士について

学生A：環境の変化できつい部分があった。

学生B：夜遅くまで起きてしまい、朝余裕がない。

学生C：日誌の苦戦で寝不足だった。

学生D：薄着をして風邪を引きそうになった。

学生E：集団行動がきつい。一人の時間がほしかった。

学生F：家事を任せっぱなしだった。

⑥ 実習中で嬉しかったこと

実習で嬉しかったことについては表9の通りである。担当指導者からの指導や実習中に困ったことと同様に「利用者児(者)とのかかわり」が28.5%と最も多く、「職員との関係」が17.1%で高い評価である。これは、

10日間の実習のなかで、自らに助言指導をして下さり無事終了したことへの感謝の気持ちや、職員との信頼関係が構築されたことによる結果であると考えられる。また、その他についても相手と意思疎通が可能になり、気持ちがつながったことが「嬉しい」という言葉で表現している。

これらを踏まえると、養護支援方法や施設の理念を理解することも大切な目標であるが、まず信頼関係を構築できる技術を身につけることが大切であると考えられる。

なお、「いつも笑顔で接することができた」17.6%は、10日間の実習を笑顔で過ごすことができたことの自らを評価した内容である。

表 9

実習中に嬉しかったこと		
	度数	パーセント
施設職員との関係	115	17.1
利用者(者)との関係	191	28.5
担当者の細やかな指導	96	14.3
利用者(者)への支援技術	107	15.9
実習日誌が思うように書けた	44	6.6
いつも笑顔で接することができたか	118	17.6
合計	671	100.0

【表9の項目に関する自由記述】

* 職員との関係について

学生A：非常に優しく、困っていたとき助けてくれた。

学生B：先生方も日々同じようなことで悩んでいることを知り話せた。

学生C：忙しいなか、丁寧に指導された。

* 利用(児)者との関係

学生A：最初挨拶をしてくれなかった子が挨拶を続けることで返してくれるようになった。

学生B：会話できなかった利用者とコミュニケーションが図れた。

学生C：暴言を吐いてたこに好きと言われた。

* 利用者への支援技術と細かな指導

学生A：発作が起きたときの状況。

学生B：苦勞する子への対応の仕方。

学生C：食事・排せつ介助。

学生D：利用児が過去や今の気持ちを話してくれ深く理解できた。

学生E：泣く、危険なことをする利用児の対応。

学生F：B型肝炎の利用者への対応。

⑦ 社会福祉施設を理解し、施設実習が満足できるものであったか。

社会福祉施設を理解し、施設実習が満足できるものであったかについては表10-1・2の通りである。

社会福祉施設を理解できたかでは、「かなりあてはまる」54.5%、「非常にあてはまる」25.6%で、80.1%の学生が施設を理解したと応えている。

なかでも、養護支援とは何らかの身体的支援、精神的支援が必要であるが、そのまえに「同じ人間であり、同じ感情をもっている」ことを理解したことは大きな収穫であると考えてる。

表10-1

	社会福祉施設を理解できた	
	度数	パーセント
非常にあてはまる	54	25.6
かなりあてはまる	115	54.5
だいたいあてはまる	39	18.5
あまりあてはまらない	3	1.4
全くあてはまらない	0	0.0
合計	211	100.0

表10-2

	施設実習に満足している	
	度数	パーセント
非常にあてはまる	126	59.7
かなりあてはまる	61	28.9
だいたいあてはまる	20	9.5
あまりあてはまらない	3	1.4
全くあてはまらない	1	0.5
合計	211	100.0

【表10-1・2の項目に関する自由記述】

学生A

10-1 実習前は不安としか考えてなかったけれど、施設もやり甲斐のある仕事であると気づけて良かった。

10-2 障がいの有無に関わらず、同じ人間であることを忘れては行けないと感じた。また、障がいがあるからと諦めてはいけないと思った。

学生B

10-1 幼児はいなかったものの、保育士という職の範囲の広がりを見つけることができた。

10-2 もう一度施設について調べ直し、経験と照らし合わせることができた。

学生C

10-1 あまり関わることのなかった障がい者の方と関わって、視野が広がったように思う。

10-2 10日間なので、全てではないが、1日の流れなどは知ることができた。

⑧ 実習を終えて学んでおきたかった科目について

実習を終えて何を学んでおきたかったかを記述してもらった。そのなかでも養護原理と小児保健の講義を挙げる学生が多く、その理由を養護原理は「もっと施設の役割を理解しておく必要があった」、「虐待児について」、「発達障がい児とのかかわり方」などである。また、小児保健では、「何人かの学生が「てんかん発作」を目の当たりにして、どのような処置が必要なのか、児童の病気の種類と症状・対処方法、感染症についてなどを学んでおく必要があった」と回答している。その他の教科については下記のとおりである。

- * 「乳児保育」 おむつ交換などに手まどうことがあったから。
- * 「発達心理学」小学生や中学生がいたので、その子どもたちのかかわり方。
- * 「社会福祉」実習中の講義のなかで社会福祉で習った言葉が多くでてきたから。
- * 「児童福祉」子どもが保護されるまでの流れなどよく知っておくべきだった。
- * 「幼児音楽」手遊びや歌を通じてコミュニケーションを図ることができるから。
- * 「幼児造形」壁面やレクリエーションなどに使える紙工作など。
- * 「人間関係」利用児（者）と関わるのが難しかったから。
- * 「保育者基礎演習」対人援助技術やコミュニケーション技法など。
- * 「障害児保育」ダウン症・てんかん・自閉が多くおられた。予備知識があると違うから。
- * 「養護内容」さまざまな子どもが生活していたから。ここに示した科目以外にも「保育原理」、「言葉」、「教育課程総論」などが記述されていた。また、学生から挙げた科目を概観すると、殆どの科目が本学一年生が履修する科目である。ただ、2年生で施設実習を履修した学生は、2年後期で履修する「障害児保育」と「養護内容」を挙げている。実習先が社会福祉施設であることを勘案すると、この2教科と社会福祉援助技術など、ソーシャルワークに関する科目を履修して実習に行くことがより学びが深まると考えらる。

3) 実習先に訪問する教員に関する質問 (自由記述)

保育学科の教職員が施設訪問する時期は、実習を開始して4日目以降である。アンケートに訪問日が適性であったかについて質問したが、殆どの学生が現在設定している時期が望ましいと述べている。

次に訪問した教職員に求める内容や感想の殆どに、「優しい言葉をかけてほしい」、「励ましてほしい」、「悩みを聞いてほしい」と言った内容を記述している。その他は下記のとおりである。

【感想】

- *泊まり込みで誰にも会えないなか、先生が来られて、また明日から頑張ろうと思えた。
- *実習の中間頃に来てくれたので、不安な部分を話せて楽になった。
- *実習先での不安や悩みといったものを丁寧に聞いて欲しいと思う。
- *慣れない環境の中で生活していて、先生が来てくれてとても安心したし、落ち着けてとても嬉しかった。
- *巡回して下さることはとてもうれしい。施設の先生から伝わったことを間接的に注意され、今後の自分の実習を直していき、改めて頑張れる。

【要望】

- *担当の職員に言えないこと、聞けないことに対して適切なアドバイスなどをしてほしい。
- *先生の訪問を楽しみにしているので、全員に会ってほしい。
- *職員の方が近くにいたので、少し話しづらかったです。できれば学生と先生で話しがしたかった。
- *一対一で話しがしたかった。
- *職員からの助言を詳しく教えてほしい。
- *利用者との関わりについてアドバイスしてほしい。

このように、実習の折り返しの時期に訪問教員と会うことで、学生は安心し、悩みやアドバイスを受け残りの実習を前向きに取り組むことができると考える。これまでの訪問方法の手順と要望の内容は変わらないが、訪問時には学生と教員だけが話せる環境をつくり、悩みや助言を行うこと。担当指導者が前半の実習をどのような評価しているかを伝え、残りの実習目標を明確にすできるようにすることが今後の課題である。

IV. おわりに

保育士の社会的役割は、家庭養育の補完の場であり、教育の場である。そのなかにおいて、社会福祉施設で生活する児童や障がい児(者)は、在宅で生活したい気持ちを余所に施設での生活を余儀なくされているため、最大限の配慮が必要である。したがって、実習先での学生の立ち振る舞いによっては、利用児(者)の情緒を乱さないことに留意して取り組まなければならない。

今回本学短期大学保育学科の昨年と本年のアンケートをもとに保育実習のひとつである施設実習の課題を明らかにしてきた。実習前は、なぜ施設実習に行く必要があるのか疑問に思っていた学生も少なくない。しかし、実習を体験することにより、社会福祉施設と施設で働く保育士の役割を十分理解できたことは、目標でもある「施設への理解」は達成されたと考える。

教育的課題として、1. 課題や目標を明確にする、2. 実習日記に関する課題、3. カリキュラムの再構築を挙げることができる。まず、課題・目標については、ボランティア体験を通じて「体験する意味」を学ばせることにより、生活する児童の特徴、対応方法、養護支援方法を事前学習していくことができる。

実習日誌については、日頃から記述する訓練をすることが、実習目標の沿った内容となり、悩む時間が短縮されるのではないだろうか。

カリキュラムについては、保育士養成課程に必要な科目が定められているが、保育実習である施設実習、保育所実習の順序で実習するのであれば、社会福祉施設で生活する児童を養護する方法などを学ぶ養護内容や障がい児を理解する障害児保育などを事前に学ぶことが、施設実習の意味を高め、保育士の職域について深く理解する機会となるのではないだろうか。

参考文献

- 1 施設保育士養成カリキュラム開発に関する研究 平成18年度 総括研究報告書 主任研究者 圓入智仁 厚生労働科学研究費補助金 政策科学推進研究事業 平成19(2007)年3月
- 2 保育実習指導のミニマムスタンダード 全国保育士

養成協議会 編 北大路書房 2007年10月30日

- 3 ワークシートで学ぶ保育実習 1・2・3 相浦雅子
那須信樹 原孝成 編 同文書院 2008年6月20日
- 4 福祉小六法 福祉小六法編集委員会 編 代表 宮
田和明 株式会社みらい 2008年4月1日
- 5 生命を大切にするための教育について－施設実習の
意味を中心に－ 佐藤達全 育英短期大学研究紀要
第22号 2005年2月
- 6 これからの実習指導についての一考察～児童福祉施
設実習（居住型）を中心に～ 中原大介 大阪健康
福祉短期大学紀要 第7号 2008年3月

引用文献

- 1 子どもの養護－その理念と実践－ 水田和江 中
野菜穂子編 株式会社みらい 2007年4月1日
- 2 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育
士養成施設の指定及び運営基準について」 2003(平
成15)年12月9日
- 3 施設実習の手引き 岡山県保育士養成協議会 編
集・発行 平成19年3月31日
- 4 施設育士養成カリキュラム開発に関する研究 平成
18年度 総括研究報告書 主任研究者 圓入智仁
厚生労働科学研究費補助金 政策科学推進研究事業
平成19(2007)年3月

(注1) 児童福祉施設とは、助産施設・乳児院・母子生
活支援施設・児童養護施設・保育所・児童厚生施設・
知的障がい児施設・知的障がい児通園施設、盲ろ
うあ児施設・肢体不自由児施設・重症心身障がい
児施設・情緒障がい児施設・児童自立支援施設及
び児童家庭支援センターである。

(注2) 施設実習とは、乳児院・母子生活支援施設・児
童養護施設・知的障がい児施設・盲ろうあ児施設・
肢体不自由児施設・重症心身障がい児施設・情緒
障がい児施設・児童自立支援施設・知的障がい者
更生施設・知的障がい者授産施設などの居住型施
設で10日間の宿泊施設を行うようになっている。

